
ふたりのゆう ランデブー編

ランデブー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふたりのゆう ランデブー編

【Nコード】

N0037B

【作者名】

ランデブー

【あらすじ】

十月二日、今日って何の日だっけ？大切な日なんだけど、思い出せない。この時思い出せたら、あとで後悔する事なんてなかったのに……。

(前書き)

この作品はグループ小説です！今回は、『ふたりのゆう
です〇（へーへ）〇同じ登場人物・設定で書いてます。
〇〇編』

部屋に散らばった沢山の写真。

「悠菜……僕は、君を幸せにできたのかな？」

ゴミ箱には使い終わった大量のティッシュ。

「僕は気付いてあげられなかった。悠菜が僕の事を好きってことに……」

開けっ放しの窓からは冷気が入ってくる。

「ゴメンね悠菜。ホントに、ゴメンね」

マンションの一室から、啜り泣く声が聞こえた。

★★★★★

君は今朝。

いつものように僕を起こしにきてくれた。僕はいつものように

「あと五分」

と呟いた。

そして君はいつものように僕を抱き締めてきた。

痛いよ。離れろ！
って僕が言っても、君は離れようとしない。
重い、苦しい……。
なんて言ったら、落ち込んで会話もできない。
だから僕は、いつものようにこう言うんだ――

お早よう。

そして君は笑った。
ホントに君は、笑顔が可愛いね。
僕は目を擦り、カーテンを開けて暗い部屋を明るくする。

「悠一郎、今日が何の日かわかる？」
「えっ……？」

悠菜は突然そう言った。

「今日は十月二日だよな。……僕の誕生日でもないし、お婆ちゃん
の命日でもないし、予約していたゲームの発売日でもないし。今日
って何の日だっけ？」

「わからないなら、この話はおしまい！」
そう言って悠菜は、笑顔で部屋を出ていった。

――今思えば、この時に気付いていたら後悔なんてしなかった。
でも、もう過去に戻る事は不可能だから、あがいても惨めなだけだ。

時計を見ると、午前六時三十分だった。

僕は、起こす時間間違ってるじやんと、悠菜に一言言おうと思っ
て部屋を出る。

「悠菜！ ちょっと言いたい事があるんだけど」
大きな声で言う。

「ちょっと待ってね。今、朝ご飯とお弁当を作ってるから」

朝ご飯は分かるけど、お弁当って何だ？

今日は日曜日で学校はなくて、部活もないのに、何でお弁当を作
ってるんだ？

「悠一郎！ そんな所に突っ立ってないで、私の代わりに予定表見
てくれない」

「予定表？」

僕は、テーブルの上に置かれた一冊のノートを見る。僕が絶対に
使わないピンク一色のこのノートは、悠菜が言っていた予定表だろ
う。だって表紙には、

“ ふたりのゆうの ドキドキワクワクムラムラデート予定表” つ
て書いてるし。

「……ムラムラって。そんな所に行くのか？」
とりあえず期待する事にした。

★★★★★★

朝一で来た所。

ソレは、動物園ー！。

一本足で立つフラミンゴ、鼻の長い象、すばしっこい猿、口が大きいカバ、癒し系のパンダ、百獣の王ライオン、最近人気のレッサーパンダ、何かを投げてきそうなゴリラ、首の長いキリン、白と黒のシマウマ。

僕と悠菜は、色々な動物を見た。悠菜は、可愛いーとか怖いよーとか言っていて、楽しそうだった。

「そろそろお昼だし、お弁当食べよう！」

僕の手を引っ張り、走りだす悠菜。

「そんなに急がなくてもいいじゃんか！」

彼女が何故急いでいるのか、何も分からない僕。

ー僕は悠菜との約束も、十月二日が何の日かも忘れていた。なのに、悠菜は今日一日ずっと笑顔だった。ホントは、悲しくて泣いてもおかしくないのに、君はずっと笑顔だった。

お弁当を食べ終わり、僕は自動販売機で買ったコーヒーを飲んで、一服していた。悠菜は、芝生に寝転がっている。

「僕も寝転がっていい？ 悠菜の隣に」

「もちろん。私の隣は、悠一郎の特等席だよ」
ありがとうと言って、僕は悠菜の隣に寝転んだ。

真上には青空。

ゆっくりと浮かぶ雲の向こうには、真っ赤な太陽がある。

「何だか眠たくなってきたよ。ポカポカしてて、気持ちいいよ」

「えーっと、次の予定は。遠距離恋愛をしているカップルの物語“届かないKiss”を映画館で観るって予定表には書いてるけど」

次の瞬間、悠菜は僕の手を引っ張り走りだした。

★★★★★

映画は、カップルばかりで集中できなかった。レンタルを借りて、悠菜ともう一度観よう。

「愛する二人が離れ離れなんて、カワイソウ！」

「そうだね。会えないのは淋しいし悲しい」

でも、さっきのは映画。所詮作り物。淋しいし悲しいとは思っただけど、思っただけに過ぎない。

「映画観たし、“ふたりのゆうのドキドキワクワクムラムラデート”はそろそろ終わりだね。時間が止まってくれたら、悠一郎もずっと一緒にいられるのになあ」

「そんなに落ち込まなくても、悠菜は僕の彼女なんだから何時でも会えるじゃん。だから元気出して」

僕は、鞆からカメラを取り出した。そして、悠菜を撮ろうとした。

「ちょっと悠一郎、勝手に撮ろうとしないでよ！」

「ゴメンね」

悠菜はいつのまにか、笑顔になっていた。

「じゃあ、撮るよ。1＋1＝1」

真上には夕映えの空。

ゆつくりと沈む真っ赤な太陽が、美しい。

カシャッ

★★★★★

そして今。

僕は、大切な人が遠くに行ってしまう涙を流している。

「悠菜……」

僕は君の事が好きだった。君が、浮遊霊だって事を忘れるぐらい好きだった。なのに僕は、君と出会った十月二日を忘れていた。

「淋しいし悲しいから、アルバムを見るのが辛いよ」
涙を拭い、1ページ目を開けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0037b/>

ふたりのゆう ランデブー編

2011年1月25日02時42分発行